

現場の、電灯を消してあるくそばからひとりでに点灯されていく。巨大な人影がふわりと浮かんで現場を流れ去る。写真の怪。そのほかにも次つぎに起ころる怪異現象に、下請けの職人が仕事を拒否、遂に再度おはらいをした、などという話が、現場に働く人びとからまざまざと語られた。

学校の怪談を語る子供たちのことも忘れてはなるまい。子供たちのみならず「不思議な世界を考える会」という渡辺節子さんを中心とする小さな会が一九八五年よりつづいており、参加者はこもごも、自分の体験した不思議な話や、聞いた話を語り続け、記録を出し続けている。

さらにもう一つの視点として、自ら語り手となるうとしている人びとのことをあげたい。作品を一言一句違えぬように語るストーリィテリングの人びとは、ちょっと口承文芸から外れると思うが、伝承の語り手の息づかい、語りとを目指す人びともいる。私の周囲でいうならば日本民話の会の「語りの勉強会」の人びとで、出身地の方言をも生かしながら語りつけ、新しい語り手たちが生まれてきている。

福岡の大川市でいま私が採訪をつづけている江口松男さんは、祖父母に語りをしつかりとたきこまれた。松男さんが従兄弟などに語っていると「そこんところは違うじやない」と叱声が飛んだ。いま私たちは「そんところは違うじやない」といながら語りの勉強をしているのである。

(まつたに・みよこ／日本民話の会)

●奈良

## 大和の桃太郎と阿礼祭

—民話・童話に関するイベント小史—

斎藤 純

### 一 調査の現状

奈良県では、竹原威滋・丸山顯徳が指導する比較民話研究会が継続的に調査を行っている。すでに数冊の民話集を刊行し、橿原市の民話を編集中である。また、花園大学・古典と民俗の会と共に行った吉野町の調査成果も刊行され、現在は奈良市を調査中である。もつとも、調査地の現状では伝統的な昔話の話型は少なく、伝説・世間話が多く採集されている。また、読書し、知識を持ち、解釈を語る話者が少なくない。課題として、こうした状況への新たな対応が模索されているところといえよう。

### 二 大和の桃太郎

(1)田原本町の桃太郎イベント

奈良盆地の中央に磯城郡田原本町がある。町は、昭和四〇年代に宅地化が進行し、田園文化都市構想によって整備を進めているところである。地域の歴史は古く、唐古・鍵遺跡は有名で、平成三年(一

九九一）二階建ての楼閣を描く土器片が出土して話題になり、平成六年に復元された楼閣が多く見学者を招いている。町の北西部の黒田付近は第七代孝靈天皇の黒田蘆戸宮跡とされ、近くに黒田大塚古墳があり、聖徳太子が造ったたとい太子道も走る。

町を流れる寺川には桜並木があり、四月に桜まつりが開かれる。

平成八年、この第二回桜まつりの会場に「楼閣と桃太郎の町」と書かれた看板が立ち、桃太郎の扮装をした一団が現れた。また、七月一七～二三日に津島神社の夏祭りがあつて、多くの参詣者を集めているが、同時に開催された町民夏まつりにも桃太郎が出現した。

これらは、田原本町商工会が、地元の桃太郎伝説にもとづいて企画したイベントである。<sup>(1)</sup>

平成六年、商工会は「地域資源調査」を行つた。地域活性化のため、自然、歴史、人文・民俗、産業特産品、伝統技術等を調べるもので、翌年三月に『田原本町地域資源調査報告書』(田原本町商工会一九九五)が刊行された。その中に、町広報誌に掲載された昔話のリストがあり、黒田地区の伝説が次のように要約されていた。

「桃太郎は田原本町黒田で生まれたといふ伝説。大塚古墳の孝靈天皇の第三皇子を桃太郎という。岡山県でも桃太郎の生地は大和黒田としているとのこと。」

商工会はこれに注目し、桃太郎を村おこしに使うことにしたのである。

商工会の話によると、『太子道を往く』<sup>(2)</sup>といふ本にも黒田の桃太郎が紹介されていて、調査委員の一人に話をと多くの資料を持っていた。報告書では特に桃太郎に注目せず、むしろ楼閣を取り上げて

いたのだが、桃太郎を扱うことにしたのは取り組みやすかつたためである。隣接する広陵町では一〇年前からかぐや姫の誕生地として村おこしを行つて、その影響もあつたという。

平成七年秋、田原本町と「田原本町むらおこし本舗（商工会）」は『楼閣と桃太郎誕生のまちたわらもと』というチラシを作成する。チラシは、楼閣と桃太郎を簡単に紹介し、「吉備の国岡山でも田原本町が『桃太郎の誕生の地』としていることから、このたびまちおかしのキヤッチフレーズにかかるべ、たのしいイベントをくりひろげることになりました」と記している。

平成八年には桃太郎マークを募集し、タオルをつくる。平成九年春には県の物産展にタオルや桃太郎の木組人形を出品。一〇月には商工会と町観光協会が『神話と童話のあるさと 大和田原本』といいパンフレットを作成する。このパンフレットは、「桃太郎のあるさと大発見の巻」と題して、孝靈天皇第三皇子、彦五十狹芦命（吉備津彦命）が吉備で鬼退治をした話を民話口調で紹介し、「なにやら聞いたような話ですね。そう、桃太郎の鬼退治はこの話がもとになつたと言われています」と結ぶ。つまり、孝靈天皇の宮跡が黒田にあり、その皇子、すなわち桃太郎の誕生地だとするのである。

## (2) 桃太郎伝説の源流

実は、黒田（旧・磯城郡都村字黒田）の桃太郎伝説は、昭和五年（一九三〇）に提唱された桃太郎岡山説から派生したものである。これは岡山の鎧金家難波金之助が唱えた説で、「桃太郎の史実」（自費出版）として発表された。詳細は省略するが、難波は吉備津彦命を祀る岡山市吉備津神社の縁起と「桃太郎」の類似を指摘し、吉備

津彥命＝桃太郎と断定している。

『桃太郎の史実』は、吉備地方での陸軍大演習を秋に控えた八月に刊行された。その記念のため、難波は、一〇月一八日の吉備津神社秋季大祭に、桃太郎凱旋祭の挙行を提案する。また、桃太郎の古蹟地に銅像を建て「私共の懐かしい桃太郎を大和男子の表象として永く教訓の資料」にしたいと希望する。

同年九月二日、『大阪毎日新聞』が、「經濟風土記 岡山県の卷<sup>53</sup>」で「桃太郎と吉備津彦 難波氏の史実考査」という記事を紹介し、全国に難波の考証が知られるようになったものである。

### (3) 桃太郎と奈良県童話連盟

難波は『桃太郎の史実』の中で「桃太郎の誕生地と生ひ立ち」という節を設け、黒田の廬戸宮に言及している。彼の説は、新聞の紹介で奈良にも伝わったと思われるが、それをさらに強く印象づけたのは奈良県童話連盟である。

これは大正一五年（一九二六）五月に結成された童話愛好家の団体で、教育家・宗教者などからなり、主に童話の口演や研究・講習などを行った。<sup>〔3〕</sup>以下、同会会報の『童心』（後に『童話大和』『少子部』と改題）によつて、桃太郎の紹介の経過を追つてみよう。

まず、昭和五年一一月、『童心』四一号に、崎山生の「吉備の桃太郎会」という報告が載る。難波の研究が完成し、一〇月一九日に岡

山で桃太郎会が開催されたのだが、「同氏の研究によれば桃太郎の本体は大吉備津彦の命である。命の御誕生地は磯城郡都村黒田廬戸の宮であつて、実に我が大和と離すべからざる関係がある。そこで奈良県から誰か出席せねばならぬといふので」、崎山らが列席した。

報告によると、一七日が「前の祭」。岡山市付近の桃太郎関係地小学校で開かれた記念コドモ会で難波らの講演。一八日は「桃太郎凱旋の日」。吉備津神社に参拝し、吉備団子の奉供。小学校のコドモ会で難波らが講演し、少年団が岡山市中を「桃太郎宣行列」する。

一九日は岡山市公会堂で「吉備の桃太郎会」。歌・お話・演奏・童踊などが披露され、難波は「吉備の桃太郎」というお話をしている。

同年一二月、『童心』四二号の春日少将のコラム「鹿糞録」では、「桃太郎は大和の人ぢやといふ」に対し、「桃太郎がやれどこで生まれたかしこで死んだと日本中五六ヶ所で言い争ふなどは、心あるものゝ贊せざる所」「伝説や童話は歴史ではない」、桃太郎は日本の子供のシンボルであり、「こんど奈良公園に出来る子供遊戯場へ是非桃太郎の銅像を建てたい」と希望している。

昭和九年四月、『童心』八二号掲載の「盛大であった あやめ池の青空の下のコドモ大会」は、三月二五日、皇太子誕生記念に開かれたコドモ大会の報告である。奈良市のあやめ池コドモ遊園地で、県童話連盟と大阪朝日新聞社アサヒ・コドモ会が開いたものだが、この日、遊園地に遊覧汽車が開通し、子供から募集した車名が発表される。列車は「お伽号」。機関車が「桃太郎」で客車が「いぬ」「さる」「きじ」。

同年七月の『童心』八五号には、長江校訓導だった乾健治が「桃太郎の伝説地を訪ねて」という文章を載せている。

乾は、近年、桃太郎の研究が盛んになつたと述べ、「兎に角、童話としての桃太郎から伝説としての桃太郎に変り更に岡山の難波金之助氏などは史実まで導いてゐる。果して桃太郎は童話か伝説か史実

か？勿論童話としての生命があつて史実までは導入したくはない。

けれども童話を史実にまで深く考へたいといふのが人情である。伝説地としては木曾の桃太郎山、中国の吉備、四国の女木島、大和の黒田の四ヶ所が最も有力視されてゐる」と記して各伝説地を紹介する。<sup>(5)</sup>その記述から、岡山の難波が伝説を「童話行脚の傍ら宣伝」していたことなど、当時の状況が知られて興味深い。

なお、奈良の黒田は、桃太郎のモデルとされた皇子の誕生地であつて「さすれば桃太郎の生地とはいはれるのも無理ではない」といゝ、県内の「犬飼」「猿飼」といった地名を紹介する。そして、乾と都村小学校の元教師が桃太郎伝説を調査中と結んでいる。

昭和一年六月、『童心』一〇八号の塚田喜太郎「旅に聴く」は、奈良の旅で見聞する珍しい事物を紹介した記事。その中で「稗田阿礼の売太神社、小部スガルのスガル神社、等々と、児童教育に関する神社を一手に引き受けたる大和が、又桃太郎の発生地を有することとは、如何にも古い国ではあります」と記して黒田の桃太郎出生地をとりあげる。古さや発祥地を誇る奈良の気風と、伝説が観光用の側面を持っていたことがうかがえる文章である。

昭和一二年五月、『童心』一一九号には、六月六日、あやめ池遊園地で開かれる「桃太郎祭」のプログラムが掲載されている。同地に建設された桃太郎の銅像の除幕式を兼ねたもので、関西童話連盟主催、大阪毎日新聞後援、大阪電気軌道株式会社（現・近鉄）が賛助。第一部は、式典・挨拶・合唱に統いて有名な童話作家・口演家の久留島武彦<sup>(6)</sup>のお話とモモタロウバンドの演奏。第二部は巖谷小波を追慕した「桃太郎お伽祭」で、童話・お伽奇術・紙芝居・舞踏劇・童

話劇が予定されている。

昭和三年六月、『童心』一三二号の泰正「青葉をわたる風が桃太郎祭を讀えてゐました」は、五月一五日開催の第二回桃太郎祭の報告。穏やかな行楽気分の中で舞踏・童話劇・演奏などが披露されたのだが、「八紘一宇の大精神を、桃太郎に見だす唱揚」を説く演説もあり、軍国主義の影響も進行している。

昭和一四年一〇月、『童心』一四五号に、酒井雨虹の新民謡「桃太郎音頭」と童謡「桃太郎さんお里」が発表される。前者の歌詞に、「こゝは國中 大和の最中 今にその名も ヤンレ都村 御座れ参らせ 墓戸の宮跡へナ これが桃太郎さんの ほんと桃太郎さんの生まれたところ」。後者の歌詞に、「桃から生まれた 桃太郎さんのほんとのお里をいいましやうか、ほんとのネ ソレソレ大和の都むら 黒田のお里がそうなのヨ」とあって、難波の考証が奈良に波及し、新民謡・童謡まで生む事態が生じている。

昭和一六年七月、『童話大和』六号には、六月八日、第五回桃太郎祭を兼ねて行われた関西童話教育連盟の結成式の報告が載る。関西の童話教育団体を連合したもので、「結成総過報告」に記された宣言は次のとおり。

「太平洋波高ク、時局倍々危急ヲ告グル時、関西童話教育連盟結成セラルゝニ当り、吾等ハ愈々志操ヲ固ウシ、共ニ相携ヘテ童話教育報國ノ道ニ挺身センコトヲ誓ウ。」

戦争の深化にともない桃太郎祭は中止される。しかし、奈良の桃太郎誕生地は、第二次大戦後にもしばしば言及されている。

昭和三四年（一九五九）五月三〇日、『大和タイムス』のコラム

に、乾健治が「桃太郎の発祥地は大和」という文章を寄せ、岡山・

高松の桃太郎伝説と黒田誕生地説を紹介する。また、昭和五四年、

『近鉄沿線ぶらり散歩 大阪・橿原線編』(葛本一雄 ナンバー出版)は、「廬戸宮跡の法楽寺」という項を掲げ、「童話の桃太郎の発祥地

はこの寺の地だ、と注職はいう」と記している。同項のコラム「桃太郎の伝承と黒田」に伝説が紹介されているのだが、「山陽道を平定した、と伝えられる彦五十狹芦命が、いつのまにか桃太郎岡山説と結び付き、桃太郎、ということになった」と紹介を結んでいる。

「いつのまにか」ではなく、上記のような経緯で大和に桃太郎が誕生したのだが、それは明記されていない。巫者の託宣が伝説化するのと同じく、新しい解釈や考証であつたことが語られなくなり、在来の伝説であつたかのような容貌を示し始めているのである。

近鉄百貨店橿原店発行の宣伝誌『遊・YOU PRESS』連載の「やまと古典散歩」にも『桃太郎』伝説と法楽寺として取り上げられ(一〇一号 一九九四・一〇)、桃太郎黒田誕生説は、法楽寺を記念物とした形に落ちついていた。

それが、平成七年(一九九五)、田原本町の村おこしの資源として、商工会に注目されたのである。

### 三 売太神社の阿礼祭

#### (1) 阿礼祭と童話連盟

先の『近鉄沿線ぶらり散歩』は、「童話の神様・売太神社」の項で大和郡山市稗田町の売太神社を紹介している。『古事記』編纂の功労者稗田阿礼を祭る神社で、童話の神様として知られ、八月一六日

に「阿礼祭」が開かれるという。

この阿礼祭も、奈良県童話連盟によって始められたものである。

昭和三年(一九二八)一〇月、『童心』一五号に、仲川明「話の太祖 稗田阿礼の顕彰」という文章が載る。それによると、

「(前略) ○かつて、童話界の先輩久留島武彦先生等某所に会せられた時、談たまく話の祖に及ぶ。西洋にはアンダーセンを童話の祖とするが、日本にも童話の始祖はないかと。

○そこで第一に話題に上がつたのは稗田阿礼であつた。純然たる童話の祖といふことになればもつと下つて之を求めなければならぬであらう。然し太古は神話即ち童話であつた。その神話であり童話である古事記を伝説した阿礼をおいて他に適當な話の祖を求めるることは難しいであらう。(中略)

○阿礼の居住してゐた所は大和の国、添上郡平和村大字稗田の地であつて、この地に現存せる式内売太神社は今尚阿礼の太祖天錦女命、猿田彦命及び稗田阿礼命を祀つてゐるのである。(中略)  
○稗田阿礼のことは小学校の国史にものせられてゐるが、それはほんの短い記録である。阿礼は男子であるか、女子であるかすら確かにはしていない位である。阿礼は男女いづれであるかは学者の間にも議の分かれる様であるが、大たい女とする方が確からしく天武天皇の女舎人であったと考へるのが正当であるやうである。(中略)  
○特に我々大和の者は、からした話の祖がわが大和に祀つてある神社に歴然と残つてゐるのだから広く天下の童話及び説話家、芸術家、歴史家の共鳴賛助を得て、話の太祖としての阿礼を顕彰したいものだと考へるのである。

○我奈良県童話連盟では本年の評議員会に於いて之が顕彰を決議し、本年の紀年事業として之を実行することにしたのである。

○その意氣はあり、その熱はあってもわれわれには経済的に無力である。幸に奈良県出身の説話家としてその道の大家たる吉田奈良丸事広橋広吉氏が我々の事業に共鳴され、この九月に資金調達の為義捐講演を承諾されることになった。(後略)

こうして、童話連盟による稗田阿礼の顕彰が始まる。

なお、久留島は大正一三年(一九二四)にデンマーク派遣少年団幹部として渡欧し、アンデルセンの生家を訪問した。翌年、帝劇でアンデルセン五〇年祭を開催し、同一五年にはデンマーク国王から勲章を贈られている。

売太神社は、「延喜式」神名帳に大和国添上郡の神社として記載された式内社である。稗田は古代の猿女君氏の居住地で、稗田阿礼はその一族。近世の地誌「大和志」によると、神社は稗田村にあって「三社明神」と呼ばれていた。大正五年、県史蹟調査会委員の大宮兵馬は、報告「稗田阿礼の旧趾及び卖太神社」(『奈良県史蹟勝地調査会報告書』Ⅲ)で、売太神社は猿女君氏の祖神天鉢女命ほか二神を祀る神社と考証した。ただし、明治期の神社明細帳に「祭神稗田阿礼」とされたのには疑問を投げかけている。因みに、昭和五年、大宮の報告が「童心」三七号に転載された際には疑問を棚上げし、「土地の伝説」では稗田阿礼を祀る、と表現を改めていた。

売太神社の稗田阿礼の顕彰は、「城と川のある町—大和郡山歴史散歩」によると、明治時代に村の総代を努めた人物の提唱で始まる。<sup>(8)</sup>当初、頗るすれば立ち退きを命じられると、村人は顕彰に消

極的だったという。大正時代に稗田旧跡保存会が結成され、昭和になつて童話連盟も稗田阿礼の顕彰を開始したのである。

顕彰に共鳴した「説話家」は、有名な浪曲師の二代吉田奈良丸である。講談や浪花節は通俗教育に利用されたから、童話連盟との連携は理解できるが、一方では口演童話の方にも、これらと共通する演芸的な側面があつたといえよう。浪花節と口演童話が、稗田阿礼を祖に仰いで連帶する事態には、興味深いものがある。

昭和五年一月、「童心」三一号に、「奈良県童話連盟のために」として中川静村の「稗田阿礼讃歌」が掲載される。歌詞に、「稗田のおぢさんくる路は子供のおむかへ長いことハイハイみなさん今日は「稗田のおぢさん子供さき(中略)子供と一つしょにかけてゆこ」などとあり、「稗田のおぢさん」は私たち同人の姿を現はしたものですね」と付記している。童話連盟は「童話行脚」といつて県下各地の口演に出かけており、その姿を歌ったものである。

中川は、同年七月の「童心」三七号にも「阿礼さま讃歌」を寄せ、「阿礼さま 阿礼さま稗田の里の阿礼さま 阿礼さまアソレニコニコニコニコニ(中略)わたらしらのをらいさまだ こどもらのをらいさまだ おはなしのかみさまだ」と歌っている。

稗田阿礼は歴史から離れ、温かい子供好きの、話のお爺さんに造形されたのである。

同号には、会長の堀内竹蔵が、「阿礼祭について 全国同志の賛同を仰ぐ」という文章を発表し、稗田阿礼を「話の神さま」と表現している。この神様を祭る阿礼祭は、巖谷小波・久留島武彦・岸辺福男らの賛同、大阪朝日新聞・大阪毎日新聞・大阪放送局(現・N

H.K.) の贊助を得て、八月一六日、稗田の売太神社で行われること

になつたのだが、「就いては、更に全国有志の御賛同を仰ぎ、日本の『話の神様』として我国はおろか世界の各国に向かつてもこの話の神さまを顕彰すると共に、千二百十八年の昔に著されたる我国の昔がたり『古事記』の存在を誇りたいと思ふ」と記している。

昭和五年九月の『童心』三九号は、八月一五～一七日に行われた第一回の阿礼祭特集号である。その「阿礼祭記録」によると、一五日まで準備で、祭典や会場は稗田の村人が用意した。この日、大阪放送局で連盟同人が記念の神話劇「天の岩屋」を放送。

一六日は午前中に売太神社で祭典。その後、平和村女子青年団による阿礼さま踊。午後は地元小学校で「記念お話大会」。児童向に巖谷・岸辺らのお話があり、大人向には久留島のお話と吉田大和丞（奈良丸）の浪花節が演じられる。夜に盆踊りが行われるが、奈良地方でよく踊られる大和祭文踊（江州踊り）に新作の「稗田阿礼さま」の歌詞を載せ、奈良第一の音頭とりという北岡栄市が音頭をとつた。一七日は奈良市に会場を移し、「記念お話大会」で童謡舞踏やお話を演じられ、午後から祝賀会が開かれた。

これらの報告にはユーモア・冗談も交じり、楽しいイベントだったことがうかがえる。

なお、祭に対し幾人かの児童文学者が「芳情」を寄せているが、講釈師の名や、藤沢衛彦・柳田国男といった名前も見える。

昭和六年八月一七日は第二回の阿礼祭。講釈師の参拝もあって旭堂南陵らが肖像を奉納している。また童話会・講演会では童話・舞踏に混じって講談・少年講談が演じられている（「第二回阿礼祭」）。

### 記録「童心」五一 一九三一・九。

その後も毎年阿礼祭は開催され、昭和七年一月五日には東京で阿礼祭を挙行（「東京の稗田阿礼祭」『童心』六六 一九三二・一）。

昭和八年の阿礼祭には、かの難波金之助が参拝、講演をする（「第四回阿礼祭の記」『童心』七五 一九三三・九）。昭和八年九月の『童心』七五号では「全国各地で阿礼祭」として、「願くば全国各地でお話の神様をまつる言靈祭を執行し、同時に童話大会のやうなものを開かれたら意義ある事だと思ひます」と呼びかけている。

#### ③「童話の神様」という見立て

ところで、昭和九年八月、『童心』八六号に、仲川明がこれまでの阿礼祭を回顧した文章を寄せている。それによると、阿礼祭の発端は、大正一五年頃、「大阪の或る会の席上久留島先生が『外国にはアンデルセンの様に童話の神さまを祀つてゐるが、日本は日本で話の神様といふものはないだらうか』と尋ねたことによる。これを聞いた中村易一が仲川に伝えたところ、仲川は稗田の売太神社を教え、「十年も前から村の人は顕彰につとめてゐるが、未だ世の中へは広く知られてゐない。アレがよからう」と答えたという。

この記述で興味深いのは、アンデルセンにまで「童話の神様」という概念をあてはめていることである。久留島が語った言葉のように書かれているが、昭和三年、仲川が「話の太祖 稗田阿礼の顕彰」で記した時は、「西洋にはアンダーセンを童話の祖とするが、日本にも童話の始祖はないか」であったはずだ。売太神社と阿礼祭を経て、稗田阿礼は話の始祖から話の神様になり、同時にアンデルセンも童話の神様になったのである。

そもそもは西洋を模範にした童話の創始者を探し、それを古代に求めて「始祖」と位置づける。そこには時代を遡らせて古さを誇ろうとする、西洋へのコンプレックスとナショナリズムもほの見えるようである。「始祖」の顕彰は祭となり、祭を通して「始祖」は「神」になる。そして、西洋の文化も、こうして出来た「神」という見立てで語られることになった。このプロセスが、古典の地、奈良で進行したのである。

稗田阿礼も、当初は研究に従った比較的中立的なイメージだった。が、やがて子供や話好きのお爺さんに仕立てられる。そこには連盟の抱く理想が投影されている。自分達の活動の祖であり、理想であり、神とされた者。村の民俗でいえば始祖神・開発神に似た役割を持つ、童話連盟という集団が造った新しい「フォーク・ヒーロー」といえるのではないか。セミプロ的に語りを行なう集団にも、独特的の民俗文化が見つかる可能性があるといえよう。

もちろん稗田阿礼の顕彰には、教科書等を介した国粹主義的な政策の影響を考えなければならない。しかし、やさしい話好きの老人像は、そこから出てきたものとは考えにくい。国家の規範像が浸透するとき、一般民衆はそれを利用して、自分たちの表現もすべりこませるのである。

さて、阿礼祭も時代の影響をうける。昭和一二年の阿礼祭では「日の国に日の御子を頂いている吾々は暑い」といつてはいけない」という挨拶。童話は「時節柄の軍国氣分ゆたかな話であったから子供の喜ぶこと／＼」（「阿礼さまを祭る日」『童心』一二三一九三七・九）。昭和一三年には「満州匪賊」「爆弾の長靴」といった演目も

見られ（「阿礼祭漫録」『童心』一三五一九三八・九）、昭和一七年のプログラムは講演「古事記と日本精神」。さらに「古事記神話を語る」。祭典では次のような宣誓がなされた。

「我々日本の童話人は、日本の少国民に対して、先づ日本の神話を語りて日本精神を昂揚致します」（『童話大和』二〇一九四二・九）。

第二次世界大戦後は、終戦の翌日から阿礼祭が始まり、平成九年で六八回を数える。現在でも「稗田の舞」「阿礼様音頭」が奉納され、拝殿では全国童話人協会による「奉納童話会」が行われている。また、県童話連盟による「奉賛童話会」も催される。あまり知られていないが、稗田を含む平和地区は「語り部の里」とされ、平成五年に建設された平和公民館（別称「童話・民話の殿堂」）には、囲炉裏のある「語らいコーナー」が設けられた。

#### 四 おわりに

昔話の採集が困難になつた現在、今まで顧みられなかつた、教科書・児童文学等の書物で標準化した桃太郎のような話にも目を向ける必要があるだろう。そうした来歴の話であつても、なお話者・地域・時代による相違があるとすれば、その原因の分析は、民話やそれをとりまく状況への理解を深めるだろう。

これまでの口承文芸研究が扱つてきた民話の意義を否定するものではない。もし、口承文芸の時代は終わつた、昔話の時代は終わつたというならば、それを歴史として振り返り、時代との関わりの中で、役割や位置づけ、意味等を考えいくことも必要だろう。これ

まで採集された民話は、こうした時代をくぐりぬけてきたものなのである。それを、あらためて考慮に入れた評価が必要になっている。

注

(1) 田原本町商工会事務局長、大沢義明氏にお話をうかがった。  
なお、東京の「日本桃太郎の会」の会合にも、田原本町の関係者が出でている。

(2) 岡本精一『太子道を往く』奈良新聞社 一九八七

(3) 仲川明「童話連盟回顧五年」(『童心』四二 一九三〇・一)

(2) なお、童話連盟の業績に昭和八年刊行の『大和の伝説』の編集がある。県単位で伝説を集めた、もつとも早い時期の伝説集で、柳田が序文を寄せている。高田十郎が共編。大和史蹟研究会発行。『童心』に関係記事があり、経過がうかがわれて興味深い。

(4) 『童心』は、奈良県立図書館所蔵。

(5) 各地の桃太郎伝説は、拙稿「童話見物の誕生——桃太郎伝説の成立に見る口承文芸の観光化について」(『旅の文化研究所研究報告』六 一九九八)および同稿記載文献参照。

(6) 久留島は、自ら經營する幼稚園で桃太郎主義を標榜し、巖谷小波とともに銅像の建設を呼びかけていた(滑川道夫『桃太郎像の変容』東京書籍 四二五~七頁)。

(7) 前掲注(6) 滑川 四五二頁

(8) 鈴木良編『城と川のある町——大和郡山歴史散歩』 文理閣  
一九八八 二〇〇~二三〇頁。

(9) 当時、稗田阿礼には女性説もあり、昔話の語りは女性の役割が大きいのに「話のお爺さん」像が生まれたのはなぜか。連盟の活動の投影といえようが、やはり公的な場の語りは、童話であっても男性の役割とされていたのだろう。乱暴な対比だが、童話・昔話、公・私、男・女という当時の通念を設定できるかも知れない。なお、老人像への収斂も興味深い。

(10) 仲川明「第五回の阿礼祭を行ふまで」(『童心』八六 一九三四・八)

(11) 中村易一「回顧十年」によると、「大阪で放送童話研究会が中山文化研究所であった席上、久留島武彦先生が外国にはアンデルセン、グリム兄弟等童話家の祖がある所が日本は神国として伝説の國神話の國として昔から語り部と役人迄あつた此の語部の文書に残つた人として日本古事記の話者、稗田の阿礼を祠つてあるお宮が大和か山陰地方になければならぬ」と言つたといふ。また、仲川明「童話連盟創立前後の日記より」によると、中村が久留島の話を伝えたのは大正一五年二月一九日。連盟結成の話がまとまりつつあつた頃で、二一日には「奈良県童話連盟の発会と相俟つて『語部の祖』を祭る式をやらうといふ様な相談まで中村君と一人でやつた」という(『童心』九五 一九三五・五)。(さいとう・じゅん／兵庫県立歴史博物館)